分　野　（　1　）小児・思春期を対象とした環境保健事業の事業実施効果の適切な把握及び事業内容の改善方法に関する調査研究

研　究　課　題　名：健康診査事業の効果的な実践及び改善のための評価手法に関する調査研究

調査研究代表者氏名：望月　博之

評価コメント
・肺音のモニターについてはまだ未熟と考えらえる。咳嗽のモニターはかなり進歩が見られている。これらの器具については取り扱いが容易であって実用化に適したものでないと普及が難しいので十分配慮願いたい。咳嗽のモニターの完成を期待している。 ・喘鳴、咳嗽の客観的な評価法がほぼ確立しており評価に値する。今後症例を増やした調査結果に期待したい。 ・音響学的な視点で喘息は基より、その予備群としての喘鳴疾患の診断、慢性咳嗽の研究に寄与する画期的な研究である。今後、開発をすすめ、測定法が一般化できるようになることを期待する。 ・乳幼児肺音測定装置及び小児咳嗽モニターともに、新たな客観的な臨床知見が得られる可能性が高い。 ・非侵襲的に肺音のHFIを解析して客観的評価を可能にした喘鳴の臨床的意義を更に多数例で展開する、次のステップへの方法を更に検討することを望む。 ・咳の客観評価は従来から中々困難であったが今回開発した方法は臨床応用が期待できそうである。薬物効果の制定には特に効果が大きいと思われるので多数例での検討を期待したい。 ・かつて、心臓弁膜症や心奇形の診断に心音図は大きな役割を果たしていた。しかし、心エコー技術が発達するに及んでその地位は心エコーに取って代わられた。しかし肺の場合、超音波は無力である。もし、感度・特異性において優れた肺音図ができれば、その臨床的な応用性は広く、有用性は高い。いろいろ技術的な問題や困難はあるかもしれないが、粘り強く一つ一つ克服して臨床的に耐えられるものを完成させることを期待している。 ・従来、学問的体系になり得なかった咳、喘鳴をオリジナリティーのある手法で科学にしている。得られた手法から、いくつもの新しい事実が発見されうることが考えられ、乳幼児喘息の診断に大きな力になるであろう。